大阪女学院大学・大阪女学院短期大学　教員養成センター

〈英語教育リレー随想〉 第 142 号　　2023 年 12 月･2024 年1月

2025 大阪・関西万博に向けて

富永　誠

先日公務で咲洲の学校を訪問した際に、海の向こうに 2025 年大阪・関西万博（以下、2025 万博）の会場となる夢洲が見えた。工事用のトラックがひっきりなしに通過するので、急ピッチで準備が進んでいるのだろう。経済的な負担と参加国のパビリオン建設の遅れが懸念されているが、万博協会・大阪府・大阪市・経済界・政府が一致団結して成功させてほしい。

開催が近づくにつれ、1970 年の大阪万博を懐かしく思い出す。筆者は当時小学校５年生だったと記憶している。高度経済成長時代、日本全体が非常に活気に満ち溢れていた頃である。国内はもちろん、世界中から大勢の方々が吹田市の会場に来られた。父に連れられ入場したが、どこもかしこも大変な行列で、つないでいる手を放してしまうと迷子になってしまうような状況だった。最大の呼び物はアメリカ館に展示された「月の石」。初めて月に着陸したアポロ宇宙船が地球に持ち帰ったとの触れ込みだったが、かなり長時間並んだのち、実際に見ることができたのはわずか 30 秒くらいだったと記憶している。

この大阪万博で展示・発表されてその後実現しているものがたくさんある。コードレス電話は今の携帯電話の原型である。当時ダイヤル式の黒電話がようやく一般家庭に普及し始めた頃だったので、無線の電話を個人が持ち歩くことなど想像もつかず実現するはずがないと思ったが、今や携帯電話やスマートホンは人類にとって必要不可欠なものとなっている。また、電気自動車がゆっくりとしたスピードで来場者を載せて会場内を運行していたのも珍しかったが、今では電気自動車がガソリン車にとって代わろうとしている。更にリニアモーターカーは磁力で車体を浮かせて時速 500ｋｍの走行も可能というう たい文句だったが、鉄の塊が磁力で浮くなんて、しかもそれで人を運搬するなど到底信じられなかった。しかし、こちらも東京・名古屋間は 2027 年に開業する予定である。夢であったものを本当に実現していく人類の力は凄いと改めて思う。2025 万博はどのようなものが展示・発表されるのだろうか。「空飛ぶ車」のことはよく報道されているが、それ以外にもたくさんの新たな技術や製品が出てくるだろうとワクワクしている。

この 2025 万博で、大阪女学院大学・短期大学の学生や卒業生が活躍してほしいと思う。本学の強みである英語を活かしながら、通訳ボランティアとして会場で外国の方のお手伝いをしたり、航空業界に就職して関西国際空港をはじめ各地の空港でお客様をお迎えしたりするなど、考えただけでワクワクしてくる。また、アルバイトをするにしても英語ができる方が絶対に有利である。本学から会場までは森ノ宮から中央線で乗り換えなしで行ける

だろうから、様々な形で協力することは可能だ。既に前売り券が発売され、機運はこれから嫌でも盛り上がってくる。地元で万博が開催される機会はそう何度もあることではない。是非この機会に学生たちや卒業生たちが大阪女学院の看板を掲げて、2025 万博の成功に寄与してくれることを切に願っている。

（とみなが・まこと　特任教授／教員養成センター）